

飛行神社

飛行神社は、日本の航空の先駆者である二宮忠八（1866～1936）によって創建された比較的新しい神社です。安全な空の旅を祈願する場所として有名であり、航空事故で亡くなったすべての人々の霊を祀っています。世界は同じ空の下でつながっているという信念に基づき、飛行神社は国籍に関係なくすべての犠牲者を祀っています。

忠八は、幼い頃に空を飛ぶことへ興味を持ち始め、それは生涯を通してずっと続けました。両親亡き後、伯父の薬種商で働いていた 10 代の頃、彼は自らの飛行研究を支えるために凧を設計して販売しました。看護卒を務めていた 20 代の頃、彼は自然から着想を得て、固定翼のゴム製の「カラス型飛行器」を作り、1891 年にその飛行に成功しました。次に 1893 年に、尾翼がなく人が乗れる複葉機モデルである「玉虫型飛行器」を作りましたが、資金不足のため、忠八のさらなる計画は頓挫しました。彼は製薬業界で数年働いた後、八幡に土地を確保して実物大の試作機の製作を開始しました。しかし、そのプロジェクトが完了する前の 1903 年に、ライト兄弟が、動力付き重航空機の制御された持続飛行を世界で初めて成功させました。

忠八はプロジェクトを断念したものの、航空への熱意を失うことはありませんでした。人類が飛行の時代に入ると、彼は飛行機関連の事故による死者数の増加を憂慮しました。このことが彼を神職へと導き、1915 年にはこの神社を創設し、飛行神社すなわち「フライトの神社」と名付けました。その本殿は 3 つの祭壇からなります。中央の祭壇には、空の神様である饒速日命が祀られています。右側の祭壇は、航空事故で亡くなられた御霊と航空の開拓者が祀られています。左側の祭壇には、日本の製薬業界の偉人が祀られています。

この神社は 1989 年に古代西洋風の拝殿を備えて再建され、拝殿は円柱と、忠八の模型に影響を与えた動物を描いたステンドグラス装飾を備えています。小さな資料館には、忠八と彼の発明に関連する多くの品々が展示されており、その中にはスケッチ、写真、アート、凧、そして彼が開発した飛行機の模型なども含まれます。航空愛好家から寄贈された何百もの飛行機模型もここに展示されています。